

# 宗教施設の訪問者に関する一考察

南條了瑛

(2016年度 BARC 公募研究員)

## 目次

- 一 研究テーマの背景
- 二 研究の目的と方法～宗教ツーリズムの視点～
- 三 近世の増上寺参詣
- 四 現代における増上寺の取り組みと訪問者
- 五 おわりに

## 【キーワード】

伝道 宗教施設 寺院 旅 宗教ツーリズム

## 一 研究テーマの背景

具体的な宗教伝道を考える際、その成立過程として、信仰と縁遠い者が実際にその宗教と接する機会が存在しなければ、伝道は成立しない。

例えばモルモン教は、日本の都市化<sup>一</sup>とともに興隆し信者数が漸増したことで知られている<sup>二</sup>が、近年の日本モルモン教信者へのアンケート調査の結果によると、「教会に入会したきっかけ」という質問では、「宣教師の勧誘（四二・〇％）」が最も多く、「家族の影響（三九・九％）」と合計して八割を占めたことが明らかとなっている<sup>三</sup>。つまり、モルモン教信者の多くは、「宣教師の勧誘」あるいは「家族の影響」によってモルモン教と接する機会を得て、入信しているのである。都市化とともに信者数が漸増したモルモン教信者の入信過程からいえることは、信仰と縁遠い者に対し、モルモン教側が巧みにモルモン教と接する機会をつくり出しているということである。

また、猪瀬優理による北海道創価学会の調査票調査からみえる信仰継承の考察によると、信仰を継承する要因には親の影響が深く関わっていて、教団組織の発展や文化伝達のメカニズムを解くためには、ジェンダーの視点が不可欠であるという<sup>四</sup>。ここでも、親という信仰者の行動によって、信仰と縁遠い者が宗教と接し、入信していくことがわかる。

こうした入信過程はあくまで個別の事例であり、宗教伝道が成立する過程は多様であろうが、少なくとも伝道という事象は、信仰と縁遠かった者が、実際にその宗教と接する機会をえることによって成立することは容易に推察されるところである。

さて、信仰と縁遠い者が、実際にその宗教と接する機会となりうる有効な場の一つに、宗教施設への訪問がある。人々が、ふらりと宗教施設を訪れ、その者が実際にその宗教と接することができ、場合によってはその者がその宗教を信仰していくといった展開は、古くから歴史のある伝統教団の宗教施設（教会・寺社仏閣など）であればあるほど、その可能性は高いともいえよう。

近年の日本政府観光局（JNTO）の推計によると、二〇一五年一年間に日本を訪れた外国人客数は過去最高の約一九七三万人おり、二〇一一年の約六二二万人に比べ、飛躍的な増加傾向にある<sup>五</sup>。また、旅行としてではなく、居住している外国人登録者数についても、二〇〇八年まで年々増加し、その全体的な伸びは止まりつつあるなか、引き続き中国・台湾人の数が増加し続けている。つまり、現代社会は、年々急増する訪日・在日外国人客の影響などで、世界中から多くの人々が宗教施設を観光する傾向にあるのである。

さきに挙げたモルモン教や創価学会の場合、それが外来系新宗教という性格を持つ以上、信仰者の宣教・布教・勧誘などの行動によって自ら信者獲得へ出向いていくことを余儀なくされるが、伝統教団の場合、信仰者が自ら出向かずとも、信仰と縁遠い者の方から自然と宗教施設へ訪れているのが、今日の状況といえるのである。

このように、宗教施設の訪問という現象は、宗教伝道を論じる上で重要な要素である。

## 二 研究の目的と方法―宗教ツーリズムの視点―

さきの背景に基づき、本研究では、日本の仏教施設における「観光客」の増大という現代的課題に着目し、宗教施設側と観光客側との間で生じる問題について検討し、宗教伝道の成立過程の一端を探ることを目的とする。

特に本研究では、浄土宗の観光寺院として一般的に知られている東京都港区・三緑山広度院増上寺（以下、「増上寺」とする）の取り組みを調査し、

一 「……で言う都市化とは、高度経済成長期をはさむ一九五五年から一九七五年の間に見られた、顕著な人口増加を伴う都市化を指す。」（沼野治郎「都市化と新宗教の興隆…創価学会と日本のモルモン教会の場合」『現代社会学』二、二〇〇〇、八六頁）

二 沼野治郎「都市化と新宗教の興隆…創価学会と日本のモルモン教会の場合」『現代社会学』二、二〇〇〇

三 杉内寛幸「外来系新宗教の日本人信徒…モルモン教を事例として」『宗教研究』八九、二〇一六

四 猪瀬優理「信仰継承に影響を与える要因…北海道創価学会の調査票調査から」『現代社会学研究』一七、二〇〇九

五 日本政府観光局（JNTO）ホームページ <http://www.jnto.go.jp/jpn/>

またそれを宗教ツーリズムの視点を用いて考察を行いたい。

ここで、本研究で援用する重要な視点となる宗教ツーリズム研究について若干述べることにする。

宗教ツーリズム研究とは、宗教学・宗教社会学における宗教と観光を取り扱う視点あるいは研究分野のことであり、一九九〇年代以降に西欧を中心に発展してきた比較的新しい学問である。

近代以降、観光が宗教とは無縁なものだとする見方が支配的であったため、従来こうした問題に関する研究上の蓄積は決して多いとはいえなかったという<sup>六</sup>。しかし、現代社会の聖地巡礼には、観光の要素が多分に混ざり合っていることから、宗教と観光との両者を切り離して捉えてきた従来の研究の枠組みでは捉えきれない状況が生まれ、観光が宗教とは無縁とする通念を見直す必要が出てくる。そして、二〇〇七年、山中弘が中心となつて「宗教と社会」学会の研究プロジェクトとして「宗教とツーリズム」研究会を立ち上げ、多くの研究発表が行われるようになる。そして二〇一二年、その研究会の成果として論集『宗教とツーリズム―聖なるものの変容と持続―』（世界思想社、二〇一二年）が出版される。また、同年秋には、星野英紀・山中弘・岡本亮輔の三名を中心に、「聖地の構築とその変容」に焦点を当てた『聖地巡礼ツーリズム』（弘文堂、二〇一二年）が出版され、五二箇所の聖地について、多くの研究者が論じている。他にも、岡本亮輔が『聖地と祈りの宗教社会学―巡礼ツーリズムが生み出す共同性』（春風社、二〇一二年）を出版し、また門田岳久が『巡礼ツーリズムの民族誌』（森話社、二〇一二年）を出版するなど、巡礼研究に観光という視点を導入する研究が多々みられるようになる。

この宗教ツーリズムの視点において、本研究では、観光客が信仰者になるという伝道的展開を認めていることに注目したい。門田岳久は、宗教ツーリズムの議論を「巡礼が信仰の旅で、ツーリズムが余暇・行楽の旅だ」という従来の二分法を超越する議論<sup>七</sup>だと述べる。これは、宗教と観光との双方が親和の関係にあるということである。すなわち、観光目的の者には少なからず信仰心が存在し、一方、熱心な聖地巡礼者にも宗教的参詣に付随して観光を楽しむ側面を持つので、時に観光から宗教的信仰に志向するという<sup>八</sup>。これは、観光客が信仰者になるという伝道的展開を示唆している<sup>九</sup>。

観光から宗教的信仰へ志向することについては、観光社会学者のエリック・コーエンの論がある。コーエンは、旅人について、①レクリエーション・モード、②気晴らしモード、③経験モード、④体験モード、⑤実存モードの五つに分類する<sup>一〇</sup>。このうち、⑤「実存モード」においては、旅人にとって劇的な変化が生じるという。これは、旅を通じて、それまで生きてきた社会や文化とはまったく異なる生き方を選びとり、新たな価値観のなかに生きるのである。コーエンは、この「実存モード」の旅を、宗教的な回心に近い状態と述べている<sup>一一</sup>。信仰と縁遠い訪問者も、それぞれの信仰レベルで聖地に意味を見出し、そこから宗教的な回心に近い体験を引き出すのである。

「実存モード」の体験は、訪問者にとつての「真正性<sup>一二</sup>」であり、必ずしも聖地あるいは教団側が語る本質的な信仰ではないかもしれない。しかし、そのなかには、少なからず聖地を取り巻く関係者との交渉・交流によって、聖地あるいは教団側の伝えたい信仰を体験する者もあるであろう。

六 山中弘編『宗教とツーリズム―聖なるものの変容と持続―』（森話社、二〇一二年）四頁。

七 門田岳久『巡礼ツーリズムの民俗誌―消費される宗教経験―』（森話社、二〇一二年）

八 門田岳久、前掲『巡礼ツーリズムの民俗誌―消費される宗教経験―』

九 幡鎌一弘氏も、旅には、巡礼・観光・布教という三つの要素が含まれていると述べており、旅は、観光から信仰へ転換していくエネルギーを有していることが考えられる

（幡鎌一弘『近世民衆宗教と旅』法蔵館、二〇一〇年）

一〇 エリック・コーエン・遠藤英樹訳「観光経験の現象学」（『奈良県立商科大学研究季報』九、一九九八年）

一一 エリック・コーエン・遠藤英樹訳、前掲「観光経験の現象学」四八頁。

一二 宗教ツーリズム研究で重要になる概念が、「真正性 (authenticity)」という概念である。これは日本語訳するのが困難であるが、岡本によると、あえて言えば「本物っぽさ」であるという（岡本亮輔『聖地巡礼』中公新書、二〇一五年、五一頁）。宗教ツーリズムの文脈において、ホストの思う真正性と、ゲストの思う真正性は異なっている場合が多い。

信仰のない観光客として聖地を訪れたが、そこで何か特別な体験をし、時には新しい価値観や世界観を獲得するようなこともあるのである。岡本亮輔は、「場合によっては、観光の体験も宗教的と言えるような深さと強度をもちうる。その際にポイントとなるのが、他者との交流なのである。(中略)その際、その場を取り巻く人々の情緒や主体的な関与、そしてゲストとホストの交流が重要な要素になると言えよう。」<sup>一三</sup>と述べている。したがって、聖地を取り巻く諸要素を観察し、動向を分析することで、宗教伝道の成立過程の一端を導き出せると考えられる。

さて、宗教ツーリズムの研究では、聖地や観光地に集う多様な人々が織り成す関係性を、「ホスト」「ゲスト」「プロデューサー」という三つの主体から分析することがある。

(1)ホスト

ホストとは、宗教施設や聖地、つまり伝統的な寺社仏閣・教会など意味する。さらに広く言えば、巡礼者や観光客を受け入れる側のことをホストとする。現代では、「宗教」という言葉を機能的に幅広く捉え、寺社仏閣などに限らず、アニメの舞台や世界遺産の地なども、宗教的聖地(≡ホスト)として理解する。ホストである聖地が、いかに生成され、維持されているのかを分析したり、あるいは寺社仏閣などが受ける社会的・経済的影響を考察する場合が多い。

(2)ゲスト

ゲストとは、宗教施設や聖地へ訪れる人々のことである。同義語にツーリストなどがある<sup>一四</sup>。多くの先行研究は巡礼者を扱うものが多い。寺社仏閣などの聖地を訪れる人々の旅の動機や、その道中で何を体験し何を感じたのか、訪問者(巡礼者)の目線から考察するものである。

ホストとゲストという枠組みを最初に用いたのはアメリカ観光人類学者のバレーン・J・スミスである<sup>一五</sup>。スミス以降、観光人類学だけでなく、宗教学・宗教社会学でも、ホストとゲストの個別的な現状を観察し、かつホストとゲストの相互関係を分析するという方法を踏襲することが多くある。

(3)プロデューサー

山中弘はいまいうホスト・ゲストに加えて、プロデューサーという主体をおき、ホスト・ゲスト・プロデューサーという三つの主体から宗教ツーリズムを捉える。これは、訪問者(ゲスト)にとって聖地を魅力あるものとする役割を担う媒介者のことである。主に、旅行会社、鉄道会社などがプロデューサーとして位置付けられることが多い。廃れていた聖地が、プロデューサーの影響で、聖地として復興・再活性化する事例は少なくない<sup>一六</sup>。宗教ツーリズム研究では、これらホスト・ゲスト・プロデューサーという三つの主体から、行動や手段、言説などを分析することが多い。些か雑駁な概観ではあったが、以上のように、宗教施設の訪問(観光)という現象のなかの諸要素(ホスト、ゲスト、プロデューサー)をそれぞれ分析することで、観光客と信仰者がそれぞれの文脈において行動し、これらが複雑に作用することで、ときに観光客が信仰者となる宗教伝道の成り立ちが考察できると推される。

本研究では、浄土宗の観光寺院として一般的に知られている増上寺の取り組みを調査し、またそれをいまいう宗教ツーリズムの視点から深化させ、新たな者が宗教に出会う場所としての宗教施設を模索するものである。

### 三 近世の増上寺参詣

現代の増上寺の取り組みを検討する前に、その基礎的作業として、近世における増上寺の歴史について一瞥しておきたい。

一三 岡本亮輔『聖地巡礼』(中公新書、二〇一五)一五〇頁。

一四 渡部瑞樹「観光人類学における「ホストとゲスト」の相互関係」『くにたち人類学研究』一、二〇〇六。

一五 バレーン・J・スミス編・三村浩史訳『観光・リゾート開発の人類学―ホスト&ゲスト論でみる地域文化の対応』(勁草書房、一九九二)

一六 松井圭介『観光戦略としての宗教―長崎の教会群と場所の商品化』(筑波大学出版会、二〇一三)

近世という時代は、全国各地で旅が大衆化した時代と言われている。このことに相まって各地域の寺社仏閣は、こぞって布教活動に励んだことが想起される。北関東の真宗寺院においては、『二十四輩順拝記』などに記されるような、多くの親鸞にまつわる「伝承<sup>一七</sup>」が蔓延っており、民衆と親鸞とのリアルな関わり方を知る貴重な史料として再評価されつつある。当時の旅行ガイドブックとして知られる『旅行用心集<sup>一八</sup>』には、細かい旅の心得が記されていて、こうした出版物に沿って、各教団の宗教者にまつわる伝承が創作されていたことも推察されよう。

近世は寺院数が漸増する時代であり、文化十二（一八〇九年）の『掌中年代重宝記』によると、近世の仏教寺院の全国総数は九五万九〇四二ヶ寺と言われ、現代の寺院数約七万七〇〇〇ヶ寺<sup>一九</sup>に比べ、非常に多い。とくに寺院数が顕著に増幅していたのは江戸地域である。安藤優一郎によると、近世江戸における寺院の状況は、その寺院実数は不明であるが、各寺院は教線拡大のため、最大人口都市である江戸を中心に、経営基盤を強化し、その進出状況は、『明治初年の武家地処理問題』所収資料より作成された「寺社地宗派別一覧」をもとに、

禅宗 五万七〇五四坪、天台宗 五二万五八九六坪、浄土宗 五二万四六七一坪、真言宗 四九万七三二八坪、日蓮宗 三万八三四三三坪、一向宗 一〇万八〇八九坪、時宗 五三七一坪、神社 七九一〇五坪 合計二六六万〇九四七坪

と示している<sup>二〇</sup>。ここで、禅宗、天台宗に続き、浄土宗が三番目に土地を有していることが確認できる。東京都の行政区画でいえば、台東区に浅草寺と寛永寺、港区に増上寺の広大な境内地があったことで、いまでも台東区と港区に寺院が固まっている。例えば、「江戸切絵図<sup>二一</sup>」をみると、現在という東京都港区芝界限は、増上寺を中心とする寺町であったことがわかる。

寺院の収入源は、境内地や寺領が大きなウエイトを占める。これに加えて、檀家からの布施からなる。また、堂宇の建設や修復などの整備の際は、多額の費用がかさむため、どの寺院も、経済力のある檀家獲得をめざす。大半の寺院は、御開帳などの行事を通して浄財を得るが、將軍霊廟のある寺院は、幕府からの援助金があり、圧倒的な経済的基盤となる。

したがって、將軍霊廟のある増上寺は、隆盛の極みであったといえる。増上寺は、徳川家康の関東入部以降、増上寺十二代・源誓存応との関係から江戸における徳川家の菩提寺となる。その歴史については、村上博了の『増上寺史』に詳しい<sup>二二</sup>。慶長三（一五九八）年以降、江戸城付近に位置する増上寺は、徳川家の霊廟を所持することで、武家からの経済的支援（国家予算として維持される強み）があり、武家の帰依に相俟って多大な寺領を寄進されることになり、大発展を遂げる。全国の浄土宗宗務を統括する「総録所」の設置をはじめ、関東十八檀林の筆頭となる主座をつとめるなど、京都にある浄土宗祖山・知恩院に並ぶ存在として隆盛を極めるのである。

増上寺の参詣状況については、『江戸幕府日記』（国立公文書館所蔵）、吉永成正「増上寺と江戸幕府」、『仏教文化学会紀要』四、一九九六）、宇高良哲『徳川家康と関東仏教教団』（東洋文化出版、一九八七）などから知ることができる。以下、これらの成果を参照すると、以下の参詣状況となる。

初代・家康 — 参詣記録なし。

二代・秀忠 — 三度の参詣。いずれも亡父家康の霊廟「安国殿」への参詣。

三代・家光 — 一〇〇度前後。両親の菩提を弔うため、歴代將軍のなかで最多の参詣。

四代・家綱 — 秀忠年忌法要を中心に参詣。

一七 伝承とは、人々のあいだで古くから伝わる信仰や習俗などを承けて、後世へ伝えていくことである。伝承文学、口承文学などとも言われる。小学館国語辞典編集部『日本国語大辞典 第二版』（小学館、二〇〇二）や、柳田邦男監修『民俗学辞典』（東京堂出版、一九五一）に詳しい。

一八 八隅蘆菴著・桜井正信訳『現代訳 旅行用心集』（八坂書房、二〇〇九）

一九 総務省統計データ「宗教法人数総括表」<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/list.do?bid=000001071159&cycode=0> 参照。

二〇 安藤優一郎『大江戸お寺繁昌記』（平凡社、二〇〇九）一一頁。

二一 景山致恭・戸松昌訓・井山能知編『江戸切絵図』尾張屋清七（出版）、嘉永二（文久二）一八四九〜一八六二）刊。

二二 村上博了『増上寺史』（大本山増上寺、一九七四）

五代・綱吉―秀忠年忌終了とともに参詣は減る。一方、大僧正・貞誉了也へ会いに参詣へ訪れる。

六代・家宣―歴代將軍に倣った参詣。父の機縁とした参詣を大切にす。

七代・家継―幼少を理由に、代参(幕閣の代理参詣)が中心。(八歳で死去。秀忠の血統絶える。)

また、秀忠夫妻の年忌法要の結願日には必ず参詣しており、年始による恒例化された参詣にも重点が置かれていることが確認されている。

増上寺は、二代目徳川秀忠の靈廟の存在と、年忌法要の参詣を機縁に急激に発展する。しかしその後、四代家綱、五代綱吉の靈廟は寛永寺にて営まれたことで、それ以後(とりわけ秀忠の血統が途絶えた八代・吉宗の時代以降)、お互い靈廟建立をめぐって奮闘し、ほぼ交互に建立される形が定着する<sup>三三</sup>。近代以前までに、増上寺には、二代秀忠、六代家宣、七代家継、九代家重、十二代家慶、十四代家茂の、六人の將軍の靈廟がある。

こうしてみてみると、増上寺の発展は、歴代將軍による増上寺参詣が中心であり、ときに幕閣による代参が一つの要因として考えられる。増上寺にとつて、權威の源泉は將軍の靈廟があること(將軍の菩提寺であること)に求められるので、將軍が死去する代替わりの際、將軍が檀家となるか否かが、寺領拡大ならびに寺院経営を大きく左右する問題になるのである<sup>三四</sup>。

一方参詣者である徳川將軍家は、参詣スタイルを歴代將軍に倣い、將軍が参詣できなかった時には代参を要請する。時が経ち物故者が増えるにつれて幕府の機構も整備されると、それに反比例するように、増上寺で行われた將軍家関係の人物の葬儀・法要は華美になつていくと言われている<sup>三五</sup>。

こうして隆盛を極めた増上寺は、近代の江戸幕府崩壊が理由となつて、寺領喪失とともに、総合的に衰退の一途を辿る。また、明治六(一八七三)年と四十二(一九〇九)年の二度にわたる大火で、大殿他貴重な堂宇が焼失する。現在の芝公園も、もとは境内地であつたが、いまでは公園となつている<sup>三六</sup>。

#### 四 現代における増上寺の取り組みと訪問者

本研究テーマの背景で述べたように、昨今では日本を訪れる外国人の数が増えている。

急増する訪日・在日外国人客数の影響で、諸宗教施設への外国人訪問者も増えることとなる。

近世から、徳川將軍家の菩提寺となり隆盛を極めた増上寺は、近代で衰退するも、現在境内の建造物は国の重要文化財である。周辺には芝東照宮や芝大神宮、芝公園などがあり、散策コースとしての認知度も高い。伽藍の背後には東京タワーが見えることもあつて、日々多くの観光客を楽しませる観光寺院として知られている。

現在の増上寺には、接遇を推進するための独立した部署として参拝部参拝課がある。この部署では、訪問者を、参拝者・観光客・通勤者(境内を通り抜ける者)の三つに分けて、それぞれ取り組みを行っている。ここ数年で、特に力を入れはじめているのが、観光客への取り組みである。

参拝部参拝課の職員に聞き取り調査<sup>三七</sup>を行ったところ、さまざまな問題・課題が存在しているという。例えば、総論としては観光客誘致に肯定的だが、各論となると、対象が絞りきれず曖昧になることや、増上寺内での目指すべきビジョンが各々で異なることなどが挙げられる。

二〇一六年四月より、新たに二つの取り組みが実施された。

(1) 団体参拝の無料化、人数不問への切り替え

(2) 境内で法衣を着る常駐僧侶の接遇

二三 浦井正明『もうひとつの徳川物語―將軍靈廟の謎―』(誠文堂新光社、一九八三)

二四 靈廟建立代や回向祭祀料は国の負担、大規模葬儀による多くの関係者からの多額の香典、また祥月命日による布施、月命日における代参からの回向料など。

二五 吉永成正「増上寺と江戸幕府」『仏教文化学会紀要』四、一九九六、二九頁。

二六 寛永寺の上野公園、浅草寺の浅草公園(のち娛樂街)も同様の理屈である。

二七 第一回聞き取り調査は二〇一六年二月二五日、第二回は二〇一六年五月二六日に行った。どちらも増上寺参拝部職員の吉田龍雄から聞き取りを行った。

このうち、「(1)団体参拝の無料化、人数不問への切り替え」という試みは、従来予約制であった団体参拝を予約不可とし、完全無料化するものである。この点については、いまだ試行段階であり、今後の動向が注目される。無料化したことよって、どのような変化が生じたかを検討することが、今後の課題として残されている。

本研究で着目するのは、「(2)境内で法衣を着る常駐僧侶の接遇」である。

増上寺境内には、毎日多くの観光客が訪れており、なかには外国人観光客の姿も多く、常ににぎわいを見せている。境内には取水として使用されている文化財の水盤舎があり、その手前に「案内所」が設けられている。

この境内にある案内所では、訪問者が「安国殿はどこですか」「御朱印はどこでもらえますか」などと尋ねてくる。「時には人生相談を持ち掛けられ、何時間も立ち止まって話し込むこともあります」と案内所の常駐職員の柳澤氏は述べているという。単なる観光案内所で終わらない、寺院ならではの役割を果たしていることがわかる。

二〇一四年一〇月二十九日付の「中外日報(深層ワイド)」によれば、青木芳尚・参拝部部長は「大本山としての機能だけでなく、一般の人も気軽に寺に来られるようにしたい。二〇二〇年の東京オリンピックも控え、外国からの参拝者にも対応が必要」と話し、執事長である友田達祐も「外部に向かっている教化の一つの形として、仏教に縁がなく『観光』として来る人が、帰るときには『お参りした』と思ってもらえるよう働き掛けていきたい」と、信仰心にもつながる種まきとして期待していることを述べている<sup>二八</sup>。

事実、案内所常駐僧侶・柳沢の評価は良好で、個人的ファンが増えてきているという。例えば、増上寺裏にある幼稚園の母親コミュニティの人々が、柳沢を目当てにわざわざ増上寺まで訪れ、日頃の悩みや雑談をするのである。参拝部の吉田達雄によると、増上寺訪問者のなかには、本来の訪問目的である御朱印や法要参拝ではなく、常駐僧侶の柳沢に会うために参拝している人々が多いという。

つまり、増上寺側は信仰への種まきとしての伝道活動を目的としている一方で、観光客は、案内所常駐僧侶・柳沢に会いに来ることを目的としており、別々の立場が反照し訪問者増大という現象を引き起こしていることが一因として存在していることがわかる。付言すれば、増上寺側は、参拝者が増えることで増上寺の伝道活動(信仰への種まき)が成功していると感じるのかもしれないが、あくまで訪問者側は柳沢に会いにきており、両者の別々の意図が混在している状況ともいえるよう。

さて、宗教ツーリズム研究者の山中弘は、宗教ツーリズムの文脈を、ホスト(寺社側)、ゲスト(参詣者・観光客側)、プロデューサー(聖地を資源として活用しマネジメントする側)という三つの側面から捉えるのだが、次の二つの事例に注目したい<sup>二九</sup>。

(1)ホストとゲストが異なる宗教性を持ち、相互反照的に高め合う事例

(2)ホストがゲストの傾向を積極的に利用し、プロデューサーとしての役割を担う事例

先ほど述べた増上寺の取り組みを、山中の述べる宗教ツーリズムの視点からみてみると、この二つの例に当てはまる。まず、寺院側の意図と、観光客の目的との乖離については、別々の立場が反照し訪問者増大という現象を引き起こしていることになる。よって、(1)の「ホストとゲストが異なる宗教性を持ち、相互反照的に高め合う事例」と考えられる。前に述べたように、増上寺側は観光客を信仰者へ導こうとする一方で、観光客は、案内所常駐僧侶・柳沢氏に会いに来ることを目的としており、別々の立場が反照し訪問者増大という現象を引き起こしているのである。

これは、浄土真宗本願寺派築地本願寺の事例でも同じことがいえる。二〇一三年、築地本願寺訪問者の調査を行った結果、築地本願寺は観光の要素を多分に含んだ寺院であることがわかった。訪問者の人数が多く、その訪問者の興味・関心は、勤行や聴聞という宗教的活動のみでなく、建築様

二八 「中外日報」(二〇一四年一〇月二十九日付)「聖地にスポット 観光資源化 宗教ツーリズムの現況」参照。左記URLにて公開。

http://www.chugainipoh.co.jp/rensai/shinsou/20141029-004.html

二九 山中弘『宗教とツーリズム―聖なるものの変容と持続―』(世界思想社、二〇一三)

式や宿泊施設・駐車場等の、直接的には浄土真宗の教えと関係のないものである。また、東京駅や銀材の近隣に位置し、築地市場や寿司屋で薙めく「築地」という立地からも、築地本願寺は観光スポットの一つであり、訪問者の多くは築地本願寺を観光感覚で訪れるのである。つまり、築地本願寺側は、布教伝道を目的としている一方で、訪問者は観光を目的に訪問している。この両者の目的の乖離が反照し、結果相乗的に宗教施設としての価値を高め合っているのである<sup>三〇</sup>。

また、増上寺の取り組みは、山中弘の述べる②の「ホストがゲストの傾向を積極的に利用し、プロデューサーとしての役割を担う事例」ともいえる。すなわち、増上寺側（ホスト）が訪問者側（ゲスト）の傾向に迎合することで、多くの人々を増上寺へ呼び込んでいる。宗教施設に訪問する観光客が増え続ける中で、一回訪れたら終わりというケースは非常に多い。そういった訪問者がリピーターとなるには、宗教施設側が生み出す人を呼び込むための戦略と、観光客の意識がプロデューサーを通じて組み合わせるときに起こりうる。増上寺の「境内で法衣を着る常駐僧侶の接遇」という取り組みは、その意味において、プロデューサーという役割を果たしていることとみることができよう。

このような構造は、他の聖地巡礼の事例研究においても認められる。例えば、浅川泰宏は、近年、四国遍路が巡礼路としての人気を集めていることに着目し、巡礼に訪れる人々に対するホスト地域の住民による「お接待」というもてなしが「遍路道再生運動」として捉え直されるということを指摘している<sup>三一</sup>。また、先述した浄土真宗本願寺派築地本願寺の訪問者は年間推定三三万人以上存在し、その訪問者の興味・関心の多くは、御朱印、写真撮影、建築空間・設備などであり、真宗の教えではない<sup>三二</sup>。しかし、二〇一五年度より導入された「奉仕活動員」の接遇により、「奉仕活動員の方に話を聞いてもらいにきた」というリピーターの声が多数ある<sup>三三</sup>。こうした「四国遍路」や「築地本願寺」の事例は、まさに山中弘の述べる、ホストがゲストの傾向を積極的に利用することで、多くの人々を増上寺へ呼び込んでいく事例である。増上寺の観光客に向けた新たな取り組みである「境内で法衣を着る常駐僧侶の接遇」は、一度きりで離れていってしまう訪問者をリピーターにさせる効果が示唆されている。

## 五 おわりに

以上、増上寺の伝道活動を調査し、増上寺側の意図と、それに対する訪問者について些か検討を試みた。増上寺の取り組みとなる「境内で法衣を着る常駐僧侶の接遇」は、宗教ツーリズムの観点からいえば、伝道効果の高い宗教施設であることが考えられる。増上寺側の意図と、訪問者側の参拝目的とが反照して相乗的に高め合うこともあれば、両者の意識が通じ合っていない場合もある。増上寺は、信仰と縁遠い者が宗教を接する機会をえて、観光から信仰へ志向していく可能性が大いに示唆される空間といえる。

旅や観光で宗教施設を訪問する人々の動向と、宗教施設側の意図との両者を考察する作業は、新たな者が宗教に出遇える場所としての宗教施設を模索する作業にもなるわけで、宗教伝道の成立過程の重要な一端を検討できると考えられる。

これは、本研究で取り上げた増上寺の活性化のみならず、他の寺院や宗教施設にも普遍的に妥当するもので、ひいては日本の仏教者・教団による社会貢献活動全体において意義のあるものとして考えられる。

三〇 拙論「実践的伝道学の一考察―宗教ツーリズム研究の意義―」（『印度学仏教学研究』六三、二〇一四）

三一 浅川泰宏「道をブリーコラージュする―四国遍路の巡礼路再生運動―」（山中弘編『宗教とツーリズム―聖なるものの変容と持続―』所収、世界思想社、二〇一三）

三二 拙論「真宗伝道の実践的研究―浄土真宗本願寺派築地本願寺の実態調査―」（『京都宗教論叢』九、二〇一五）

三三 築地本願寺資料、二〇一六年度奉仕活動員の「業務日報」より。